

**恋愛する気がないので、隣の席の
女友達と付き合うことにした。**

岬かつみ



ファンタジア文庫

3005

序章 男と女の友情はあると思いますか

人生には落とし穴というものが存在する。

なんて話をたまに聞くが、こればかりは実際にハマってみないと分からない。
とある土曜日の真夜中、突如として家の廊下の床が抜けた。

文字どおり穴に落ちたのだ。

あまりにあまり過ぎてアニメかよと思ったがアニメじゃない。

勉強以外のことに注力したせいで高校受験に失敗し志望校に落ちた俺だが、そのときでさえここまでの落下感はなかった。

穴にハマった俺は自力で這い上がろうと努力を重ねたものの、すっぱり穴にジャストフィットしてしまっているらしく、腕を持ち上げることもできず身動きできないままの状態
で数十分が経過している。

というか無理に動こうとすると痛い。泣いちゃいそうだよ。

運の悪いことに、同居している姉は不在で帰宅はいつになるかも分からない。

スマホがあれば誰かに助けを求められるのだが、生憎と手元にはない。亡き祖父母の家に引越した日、運悪く失くしてしまっている。

志望校に落ちて、スマホも落として、とうとう家に落とし穴が空いた。これが落ち目ではなくてなんなのか。

そんな落ちぶれた俺の姿が、玄関に立てかけられている姿に映っていた。

「生首が廊下に生えてるようにしか見えななんだが？」

鏡に映った俺は、肩から下が見事に穴に埋まっている状態だった。

まさに落ち武者狩りの晒し首。

まあ祖父母が生前暮らしていたこの家は築何十年という代物で、うちの親父より年上だ。老朽化していてもなんらおかしくはない。

瀬戸内海のある島、以前暮らしていた神戸から見れば田舎も田舎、超下田舎の、おまけに集落の端に位置する海岸沿いの古民家である。

「だれかーたすけてー」

とりあえず助けを呼んでみたものの、当然ながら誰にも聞こえないだろう。そもそも隣の家まで数百メートル以上は離れているし、家自体が無駄に広いので、おそらく家のすぐ外にすら俺の声は届いていない。

恋愛する気がないので、隣の席の女友達と付き合うことにした。

こうして廊下に埋まったまま明日の日曜日を迎えるというのは、田舎に移住したばかりの元シティーボーイであるところの俺にとって、堪えがたいハプニングだ。

「もうすぐ深夜アニメの始まる時間なのに……」

俺にだってお気に入りのアニメくらいはある。それでなくても最近の土曜夜は大作アニメの放送が重なっていて、こんなところで悠長に埋まっているわけにはいかない。刻一刻と近づくアニメ開始時間に間に合わせるべく、俺はその場でじたとどろいてみた。が、それで出られるならとくに自力で脱出しているわけで、まあ無駄な足掻きだった。

あと痛い。普通に泣いちゃいそう。

緊急度で言えば、個室トイレでひと息ついた後にトイレレットペーパーがないことに気づいた以上の緊急度。否、偶然通りかかった救世主が紙を投げ入れてくれる可能性がある分、まだトイレに閉じ込められるほうがマシだろう。

と、そのとき。

「びんぼーん」

間の抜けた声とともにチャイムが鳴った。

正しくは、チャイムを鳴らしながら玄関の向こうにいる救世主が声を発したのだ。

「……どなた？」

「忘れ物した」

万一下ドロボウの類なら埋まったままの俺ではどうすることも出来なかったが、幸い声の主は友人だった。

仮に友人Tとしておく。

高校で出会った友人で、Tは天然のTであり、隣の席のTでもある。

結構トボケたところがあるのが珠に瑕だが、こんな真夜中に友人の家を訪ねるからには、なにか大切なものを置き忘れてしまったのだろう。そういう大事なものを人の家に忘れるなという話である。

「なにを忘れたんだよ？」

「うん。ポケットティッシュ」

「その程度なら取りに来なくていいだろ!!」

ちなみに、うちの家で遊んでいた友人Tが帰宅したのは晩飯前、優に三時間以上も前の話だ。それがティッシュ忘れただけで引き返してくるか？

「うーん、でも、セレブのちよつと高いティッシュだから、和泉くんは勝手に使われたらシヨックだし……、紙が柔らかくて使い心地がとってもいいんだよ！」

「いいんだよ？　じゃねーよ！」

思わず俺は自分の今の状況も忘れて声を荒らげてしまった。

だが、ティッシュ如きのためとはいえ、友人Tが来てくれたおかげで現状に光明が差したのも事実だ。

「で、入っていいんだよね和泉くん」

「入ってもいいがひとつ約束してくれ」

「うん？」

「玄関入って俺の姿を目にしても、決して驚かないで欲しい」

なにせ廊下に生首が転がっているようにしか見えないわけで、普通の人間ならそんな場面に遭遇したら腰を抜かして悲鳴を上げるだろう。

そこで想像して欲しい。

真夜中に突然悲鳴が聞こえて来たら、それを聞いてしまった人はどういう反応をするだろうか。当然一〇番の出番である。なので今の俺を見て友人Tに大きな声を上げられると非常に困る。

「じゃあ、驚かないから入るね」

友人Tはのんびりとした口調でそう言うと、玄関の扉を開ける。

そうして――

「おじゃまします。すぐお暇するから、お気遣いなく」

廊下に生えた俺の首に気づくことなく、靴を脱いで家へ上がった。来た。

さらにそのまま俺の頭の上を跨ぐ始末。

「ちょっと待て」

「なんだ、そんなところにいたんだ？」

「そんなとこいたんだ？　じゃないだろ！　普通驚くところだろ！　友人の首が床から生えてるんだぞ！」

「でも、驚くなつて言われたよ？」

「言われただけで驚かないようにするのは至難の業のはずなんだが！」

ただでさえ落とし穴に落ちて全身やるせなさに苛まれているというのに、素っ頓狂な友人の相手をしていると疲れがドツと増してくる。

「うーん……、驚くなつて言ったり驚けて言ったり、情緒不安定じゃないかなあ？　まあいいか、忘れ物とってくるね」

そう言い残して、友人Tは居間へと向かう。

「和泉くん、テレビの画面がゲームつけっぱなしになってるよ？」

「ゲームやってる途中で廊下に出たら床が抜けたんだから仕方ないだろ」

「いけないんだ。テレビゲームは平日一日六〇分、休日は九〇分って条例で決まってるんだからね？」

「それは香川県民限定のルールで俺には適用されない。今たとえ香川県に住んでいようと俺の本籍地は兵庫県だからな」

そう。俺が今住んでいるこの瀬戸内海の島は香川県に属している。

最近ゲーム一日一時間とかいうクソたわけた条例を本気で通してしまった、日本で最も後進的な県だ。クソという表現が汚いならお排泄物と言い直しておく。

「あー、その理屈はずるい。友近も他県に本籍地変えようかなあ」

友人Tには自分の苗字を一人称として用いる癖がある。

友近だから、イニシャルT。分かりやすい。

「うぬばれるなよ、うどん県民。そんな気軽に変えられるもんじゃないし、本籍地変更が必要になるのは引越しするとか結婚するとかそんなときくらいだ」

他にも離婚歴のバツ印を消すためとか色々あるらしいが、少なくとも高校一年生の俺たちには無縁な話だ。

「それでティッシュは見つかったのかよ」

「うん、あったよ。お騒がせしました」

探し物を見つけた友人Tは、たかがティッシュをズボンのポケットに突っ込むと、再び俺の頭の上を跨ごうとする。

「ってちょっと待て」

「うん？ まだ何か用？」

「用あるに決まってるだろ！ 見て分からないのか？ 分からないんだったら言って聞かせてやる、俺の体は穴にすっぽりハマって自力じゃ出られないんだ、だから助けてくださいお願いします！」

「それは見ただけじゃ分からないよー。もつと早く口で説明して欲しかったかなあ」

そう言って友人Tはのんびりとした顔のまま小さく眉をひそめ、軽く頬を膨らませる。いやなにその反応。普通は見ただけで分かるから。

だがそんな俺の心の声も知らず、向こうは「言ってくれなきゃ分からないよ」と自分の天然ぶりを棚に上げている。怒りたいのはこっちなんだが？

「で、助けてくれるよな、心の友よ？」

しかし今は怒りを押し殺し、俺はさすがの思いで友人Tを見上げた。

「ドラちゃん映画のたけしくんみたいなこと言われても、友近、ピンチのときだけ都合の良い友達にはなりたくないなあ」

心の友が冷たい。

「頼む。今度なにか奢るから！」

相手は香川県民。うどんなでも奢ればいいだろうとこのとき俺はタカをくくっていた。

「うーん、あ、そうだ」

と、友人Tはなにを考えているかよく分からない面持ちで切り出す。

「助けてあげてもいいけど、奢られるより頼みごとというか……交換条件がひとつあってもいいかな？」

「俺に拒否権はないようだ」

足元を見られてしまったが、仕方ないのでそう返す。

すると友人Tは言った。

「友近たち、付き合ってることにしちゃうのはどうかな？」

「は？」

唐突にも程がある提案に、俺はまず我が耳を疑い、そして友人Tの正気を疑った。

付き合う？ 俺が？ こいつと？

「い、いきなり何言い出すんだお前は!」

思わず俺が絶叫してしまった。

「和泉くん、女の子の股の下で大声出すのはさすがに失礼なんじゃないかなあ」

「穴にハマってるんだから仕方ないだろ! 第一、お前も女の子なら自分の股の下に男の首があるのに跨いだり突っ立ったまままでいたりするなよ!」

「うん、ズボンだからだいじょうぶだよ。友近、私服はスカート持っていないから」

——友人Tは染色体で言うところとXであり、女友達だ。

名前は、友近姫乃。

口を開けば頓珍漢だが、黙っていれば誰もが認める美少女だろう。そのくらい顔が良い。純朴そうな表情はいかにも田舎の美人っぽさがある。天然ボケも男ならマスケなだけだが、女の子のドジは愛嬌のうちだ。もともと、異性とはいえ友人は友人、俺は友近のことを友達以上の目で見えたことはない。

「そもそも自分が女の子だって自覚があるなら、こんな夜中に男の家を訪ねて来るなよ!」

「両親が知ったらなんて言うか!」

「平気だよ。お友達のおみちゃんの家に忘れ物したから取りに戻ると言ったら、お父さんもお母さんもすんなり了承してくれたし」



「なんでそこで急に和泉くんからいずみちゃんになるんだよ！ 和泉は苗字なんだが！ お前のご両親、絶対に俺の性別を勘違いしてるだろ！」

ちなみに下の名前は凜太郎だ。

和泉凜太郎というのが俺の名前である。覚えておいて損はない。

「で、どうするの？ 付き合うの？ 付き合わないの？」

埋まったままの俺の目の前に屈んで——スカート姿だと大変なことになっていたぞんちくしよう——友近は小首を傾げる。

「助けて欲しいの？ 欲しくないの？」

とんでもない二択を迫られる。

もしかして、本気で本籍地を変えなくなったとか……？

俺のハマった穴の深さなど比べようもないくらい、友近姫乃の思考は深淵だった。

恋愛感情の絡まない純然たる男と女の友情が実在するかは俺には分からないが、少なくともこのとき、俺は自分の女友達が何を考えているか理解が及ばなかった。

確かに友近は、顔が良い。スタイルも良い。

良いことづくめだが、俺にとって彼女はカノジョではなく女友達。英語にするとガールフレンドだが、日本では日本語が公用語なのであくまで女友達だ。

俺は金も時間もかかる趣味を持っている。アニメや漫画やラノベにゲーム、映画も音楽鑑賞も金食い虫で時間も食う。

貴重な高校三年間、恋愛以外にしたいことが多すぎる。

だから俺は恋愛する気がない。

落ち目のあまり穴に落ちるくらい俺だが、これだけは自信を持って言える。

恋愛する気のない俺が、不慮の恋に落ちることなんてない、と。

——そう。そのはずだったのに。

思えば俺はこのとき、人生の落とし穴にハマってしまったのかもしれない。

第一章 ゆるり島流し

さて。どちらかと言うとオタク方面に染まっている俺が、便利な都会を捨てて田舎に引越したきっかけは、高校受験の失敗だった。

住み慣れた神戸の街を離れ、瀬戸内海の島へと移り住む——などという姉の思いつきが俺が呑んだ理由は三つ。

ひとつは、高校受験の結果が心に傷を残していたから。

ひとつは、今は亡き祖母の実家その島にあったから。

ひとつは、海外でプロモーターなんぞをやっている両親が忙しくなり、高校から姉とふたり暮らしする予定だったのだが、どうせなら祖母の実家で暮らしたいというのが我が美人の姉のたつての希望だったからだ。

俺がシスターコンプレックスをこじらせているかは別にしても、基本的に俺は姉の頼みを断らない。彼女がド田舎でスローライフを満喫したいと言いついたなら、付き合うのはやぶさかではない。

そもそも弟がやきもき心配しなくちゃいけないほどガードの甘い女性ではないが、美人で氣立ても良く物腰穏やかな我が姉はたいそうモテる。

そんな姉が田舎暮らしなんて、セックスしか娯楽のない飢えた獣の群れに最上級の餌を与えようなものだろう。だったら俺が番犬代わりに傍にいたほうがいい。

これはシスコンとか関係のない真面目な話だ。家族は大事にしようというのが我ら姉弟のモットーである。

それにもろろん、島暮らしの了承は俺自身の意思もあつてのことだ。

「いっそ、癒やしを求めて都会の喧騒から離れてみようと思っただよな……」

——三月末、中学卒業後の春休み。

高校入学前の俺は、瀬戸内海を渡るフェリーに独り乗り込んでいた。

世界最長の吊り橋である明石海峡大橋の下を、船はゆっくりと進んでいる。俺を乗せた船の向かう先は、大橋の先に見える淡路島ほど大きな島ではない。

人口二万五千人程度の小さな島だ。

手元のスマホで調べたところ——島を軽く一周するのに車なら三時間程度で済むのだから、つい先日まで都会で暮らしていた俺にとっては、狭苦しいド田舎以外のなにものでもない。なにより島の住所は香川県だ。

最近ノーマメディア推奨とか言い出してテレビもネットもゲームも止めようとか言い出して本気でそういう運動をやっている県、ゲーム一日一時間とかいう条例通しちゃった県、それが香川県。

今後ネットゲームで対戦相手が香川県民だったらそれだけで「相手は香川県民だよ、落ち着いて時間使っていこ」戦法が通用してしまうし、eスポーツで香川県民が優勝した日には「あいつ条例違反してるだろ」なんてチーター以下の扱いを受けることだろう。

そうした悪評を除けば、俺にとって香川はうどんが有名な後進県でしかない。そしてこれから向かう先は、そんな香川の中でも辺境中の辺境だ。

『受験戦争に敗れて島流しだなんて、まさに戦国時代、敗軍の将の末路だな』

同じ高校を志望していた中学時代のクラスメイトから、そんな心無いメッセージがスマホに届いていた。もちろんコイツは志望校に合格している。でなければこんなコメントを寄せさないだろう。既読スルー推奨だ。

「島流しか……上手いこと言いやがって。ものの弾みでスローライフすることにしたけど、本当に良かったんだらうか」

スマホを眺めながら、フェリーの食事処で名物らしい島うどんを食べることにした。島うどん。特筆すべきは、うどんに煎餅がのっていることだ。

……なんで？　なんでうどんに煎餅？

トッピングとして収まっている三枚の揚げ煎を箸で持ち上げ、熱い汁を吸わせたまま豪快に頬張る。煎餅は美味いがうどんの具としては斬新の一言だった。ゲームを規制したらこういう発想が生まれて来るんだらうか。ゲーム脳もうどん脳も大差ないだろ。

「まあ、到着まで時間もまだまだあるし、スマホでアニメでも見ておくか」

我ながら行儀が悪いとは思うが、うどんを吸いながらスマホを手取る。

「圏外……」

しかし、海の上とはいえ日本列島的には内地みたいなものだと思っていたが、これは俺の考えが甘かったようだ。道中、条例の有無に関係なくノーマメディアを強いられる。神戸から島に向かうフェリーは三時間半もかかるというのに。

値段も平日便で高校生は一八〇〇円ほど。休日便ともなると二五〇〇円もかかる。もちろん今は自費で乗っていない。親のお金である。だが、私的に利用するとなると学生がいそれと小遣いから頻繁に出せる金額ではない。

「次に神戸に戻って来られるのは、いつになることやら」

都会に早くも後ろ髪を引かれながらも、それなりの満足度で島うどんを完食し、船窓から海の景色へと目を凝らす。

瀬戸内海は穏やかだ。

外洋と違って大きな波も立たず、船はほとんど揺れない。サーファーとかいう生き物が生息してないくらいなので、よほど波がないのだろう。片道三時間半とはいえ船旅が快適で船酔いの心配もないのはありがたい話だった。

海に向こうには、目的地の島は未だ影も形もないものの、淡路島や四国の姿が見える。

晴天のおかげだろう。

見渡す限りの水平線などどこにもないが、逆に、周囲を島に囲われていると、ここが最果ての地などではないと実感でき、微かな安堵があるのも確かだ。

……まあ、圏外なんだが。

仕方ないのでスマホと充電器を繋ぎ、船内のコンセントに挿しておく。

俺はショルダーバッグから暇潰しのラノベを引っ張り出し、優雅な船旅の読書タイムと洒落込むことにする。

そうしてしばらく経ち――

『お客様にご案内申し上げます。本船まもなく入港いたします。船が着くとき多少衝撃がある場合がございますので、危険防止のため船が完全に停止するまでそのままお席でお待ちください』

船内アナウンスの声で、ページをめくる手を止めた。

気づけばすでに窓には島の景色が映っていた。

「おおー」

島の山の傾斜を彩る桜とオリーブの木のまだら模様。海の青さとは対照的な色彩が視界に飛び込んできた。

そしてその景色を目にして、思い出す。

「……帰って来たんだな」

帰郷は小学生時代の引越以来だ。祖父母の葬儀を終えてからは、きょうまでの七年間、一度として戻ってきたことはなかった。

俺は幼い頃をこの島で過ごしている。

そのときも両親が海外でデカイ仕事を請け負ったので、祖父母に姉ともども預けられていたのだ。

都会暮らしにすっかり慣れて、すでに当時の記憶はおぼろげだが、数年とはいえ島の小学校にも通っていたことは当然ながら覚えている。

「ここでのんびりと暮らすのも、悪くないか」

このときはやはり俺も、見慣れたはずの都会の灰色の景色をすっかり忘れていた。

空と海と桜とオリブの豊かな情景には、それだけの魅力があつたのだ。だが、下船してからもその魅力が続いたかと言うと、残念ながら否である。確かに魅力的な島ではあるが、それは自分が住むと思わなければ、の話だ。港の周囲はまだマシだったが、そこから外れた途端に、呆れてため息が出るくらいのだ田舎だもの。

のどかな、しかし確実に楽しそうなのがなにもない、辺鄙な田舎の町並み。いや、町というより村。村というより集落だろう。

見たところコンビニも周囲にないし、自販機や信号も見当たらない。

当然だが背の高い建物なんてどこにもなく、言うまでもないことだが電車は走っていないので線路もない。高速道路だってない。車道を除けばほぼ全ての道が未舗装の畦道だ。港周辺から離れば離れるほど、ただでさえ田舎の風景は加速度的にのどかになっていく。牧歌的と言えは聞こえはいいが、要はなにもないだけだ。

「ここにはなにもないがあるよ——なんてフォローも出来ないくらいのだ田舎だ」

だが、空が広く感じられるのはそう悪いことじゃなかった。そんだけ。

「ええと、爺ちゃんたちの家ってここからどう行けばいいんだっけ。港からは車に乗せてもらっていた記憶があるな……」

目的地を確認すべく、俺はスマホで地図アプリを開いて——

「あれ？」

ポケットをまさぐってみたものの、そこにあるべきはずのものがない。

あるべきはずのものというのは、もちろんスマホのことだ。

俺は慌てて手荷物を引っ張り返し、どこかに仕舞い込んでいるはずのスマホを探したが、どこにもない。え、なんでないの。

チェックしたところ充電器もない。そこで気づいた。

「……………船内のコンセントに繋がってばなしだ！」

慌てて引き返そうとしたものの。後ろを振り返ってみれば、俺をこの島まで運んで来てくれたフェリーは、今まさに港を後にして次の目的地へと向かうべく瀬戸内の海に船出したところだった。

無論、泳いで追いつけるわけもないので諦めるしかない。スマホを失くしたことで今や完全なノーマディア、立派な香川県民の仲間入りというわけだ。

そして田舎の道端に座り込み、俺はいじけた。

スマホに毒された現代っ子の俺にとって、地図アプリが開けないのは致命的だった。住所や郵便番号は分かっても道順が分からない。笑ってくれ。

「嘘だろおい、こんな小さな島で迷子かよ……」

記憶を頼りにとぼと歩き始めた俺。

住所のメモはあるので交番で行き方を教えてもらおうと思っていたのだが、肝心の交番が見当たらない。

小一時間ほど彷徨って、ついに見覚えのある風景に辿り着いたときの感動と言ったらもうね、泣いちゃいそう。

見覚えのある風景というのは、満開の桜の樹が並ぶ公園だ。

ジャングルジムやブランコといった遊具も昔のまま。若干錆が目立つたくらい。

「懐かしい、小学生の頃はここでよくユッキーと遊んでいたっけ」

当時仲の良かった幼馴染の仇名をついついこぼしつつ、俺はジャングルジムへと向かう。もちろんこの歳になってジャングルジムによじ登る趣味があるわけではない。

だが今は非常事態だ。なにせ、公園からどの方角へ進めば家に到着するかさえ記憶があやふやなのだ。なので高いところによじ登ってみれば、見晴らしも良いことだし、子ども時代の記憶が甦ってどこに向かえばいいか分かるかもしれない。

「小学校低学年の頃は一番上に行くだけでクラスメイトたちの羨望の的だったが、さすがにこの歳になったら楽勝だな」

昔のように苦戦することなく、すいすいとジャングルジムのてっぺんへと辿り着く。まあ当然だ。来月から高校生だぞ。むしろ今こうしてジャングルジムに登っていることが恥ずかしい年齢だ。でもって――

「うん？」

そんな俺の恥ずかしいところを、通りすがりの女子に見られた。

いい歳して得意気にジャングルジムのてっぺんから周囲を見回していた俺を、ひとりの少女が、ぱかと大きく口を開けて眺めている。

「あ、いや、これは」

相手は俺と同年代。自分の顔が途端に真っ赤になるのが分かってしまった。

いや、好きで登ってるんじゃないんだが？ 道が思い出せなくて仕方なくなんだが？

だが、そんな心の言い訳が向こうに届いているはずもなく、ジャングルジムの上には腰を下ろしたままの俺を、彼女は驚きの表情で見つめている。

はい俺カッコ悪い。

まさか帰郷早々こんなカッコ悪いところを他人に見られるとは思わなかった。土下座してでも今見た光景を忘れてもらいたいくらいだ。

そもそも俺は女子に熱い眼差しを向けられる男子に妬みの眼差しを向けていたタイプの男。可愛い女の子に見つめられるなんて体験は皆無で、もしも見られていたとしたら「何あいつキモくね」みたいな視線を向けられている可能性のほうが極めて高い。

よし、弁明しよう。

いやでもこの状況で話しかけるとかキモい通り越して頭おかしいヤツじゃね？

俺が女の子なら一目散に逃げ去るんだが？

——と、そのとき。

なぜか女の子はあろうことか俺のいるほうに近寄ってきて、ジャングルジムの金属管に手をかけた。

「よいしょ」

そしてそのまま、遠慮なしに登って来る。

俺の隣まで。

「オッ!? オッ!? オッ!?」

予想外の事態にヘンな声出た。

なんで？　なんでこの娘、俺の隣に？

咄嗟のこととはいえ完全に頭おかしい鳴き声出している俺は、当然ながら突然のことににも対処できずにいる。

自分ひとりで占拠していたジャングルジムに同世代の美少女が急に登って来た経験など誰にもあるはずがない。

この瞬間の俺の戸惑いと狼狽ぶりを諭えるなら、さしずめ個室のトイレに上から誰かが急に押し入って来たようなものだ。

いや、ジャングルジムは個人のパーソナル空間じゃないけれども。

ちなみに、隣にやって来た少女はスカート姿ではない。細身のデニムジーンズを穿いており、れっきとしたズボンルックだ。下半身が無防備なままジャングルジムによじ登って来たわけではないとだけフォローは入れておく。

「うーん……ジャングルジムってさあ」

そして急に話しかけてくる女の子。

こちらとしては先ほどから状況が理解不能過ぎてなんて言ったらいいのかわからない。「なんでジャングルジムって名前なのかな？　ジャングルと関係ないよね？」

交差する金属管を不思議そうにポンポンと叩きながら、隣の少女は俺の顔を覗き込むようにして間近に顔を寄せてきた。

文句なしに美少女だが、なんというかその表情はほんやりとしている。

顔は良いが、まるで起き抜けの寝惚け面のようだ。

「知ってる？」

「……知らないが、名前の由来くらいスマホでネット検索したら？」

「スマホ持っていないし」

なんとか声を絞り出して返事したら、そう返された。

なにこの娘。なんでこんな自然体なの。

距離感近くない？ 田舎のJKってこんななの？

「俺も持っていないし」

自分で提案しておいてなんだが、俺もスマホを失くしたばかりなのでネット検索は出来なかった。

なのでそう言うのと、彼女はしゅんと肩を落とす。

「じゃあ検索できないよね？ うーん、がっかり」

俺がスマホを持っていないので彼女は落胆してしまいました。俺のせいです。あゝあ。

つてちよつと待て。

なぜ俺が見ず知らずの女の子にがっかりされなきゃなんのだ？

「本当のところは分からんが、ジャングルジムのジムは、フィットネスクラブみたいな、ああいうジムのことじゃないか？ 体操の運動器具とかそういう繋がりで」

「あ、ジムさんは関係ないんだね」

ジムさんって誰だよ。

名付け親にジャングル・ジム氏ってやつがいると思ってたのかよ。

女の子のド天然ぶりに、我ながら身構えていたのが馬鹿馬鹿しくなってきた。

「ジャングルのほうは……これも単なる連想だけど、一度ジャングルジムに登ったら下に降りずに登ったまま運動してる感じが、密林の枝から枝へ飛び移って暮らしている猿みたいなイメージ？」

「お猿さん？」

俺の想像力豊かな返答に、彼女は小首を傾げた。

そして、体操選手が鉄棒でやるように、柔らかな身のこなしで体を半回転させ、ジャングルジムのてっぺんで見事な倒立をキメてしまふ。

「こんな感じ？」

両脚をピンと真上へ上げたまま、逆さまになった彼女の顔が俺へと向けられる。
広い空に浮かぶ雲と、風に舞う桜の花びら、遠くから聞こえる波の音。そして倒立する
美少女。いや、背景は素晴らしいけど構図としてどうなの。

あ、再度念押ししておくけれど彼女スカートじゃないので安心して欲しい。ズボンじゃ
なかったらとんでもない光景に遭遇するところだった。

「素直に凄い」

思わず拍手を送ってしまう俺。

「ありがと。えっと、ええと……」

彼女は逆立ちした状態で器用に首を傾げ、軽く眉をひそめ。

「——お名前、なんだっけ？」

逆さまのまま怪訝そうに言った。

「いや、まだ名乗ってないが」

思わず素で返してしまう俺。

「そうだったっけ？」

「そうだよ！ 俺だってお前の名前知らないんだが！」

「そっかあ。そういうえば、友近も教えてなかったかも」

言って彼女は倒立を止め、くると姿勢を戻して俺の隣のパイプに腰掛ける。

「あ。そういうばで思い出したんだけど」

「なんだよ」

「そういうえば、きみはなんでジャングルジムに登ってたの？」

そっちかい。というか名乗らないんかい。

「友近、それが気になってこんなところまで来ちゃったんだよね」

トモチカというのは、彼女の名前か、さもなくばニックネームか何かなのだろう。聞く
感じでは苗字っぽいのが、自分の苗字を一人称として使うのは独特と言える。

彼女、性格的にもちよつと独特だけでも。

「まあ、聞かれて困るような深い理由があるわけじゃないんだが」

「高いところが好きとか？ 友近も高いところ好きだよ？」

迷子になって困っている……なんて打ち明けることに比べれば、高所恐怖症の逆だとの
たまうほうがまだ恥ずかしい気がするが、ここは素直に答えるでしょう。

「いやその、帰る家がどこにあるか忘れてしまいました……」

すると彼女は、目を丸々と見開き、びっくりした面持ちで俺の顔を見た。
 なにそのリアクション。

「普通ジャングルジムに登っても、お家の場所は思い出せないんじゃないかな」

——はい。まったくもってそのとおり。

子どもの頃の記憶だともつちや高かった覚えのあるジャングルジムも、この歳になつて登ってみたら全然高くない。だからジャングルジムの上から遠くの景色が見渡せるなんてこと、これっぽっちもなかったのである。

「でも、きみがジャングルジムに登ると物忘れが治るタイプの男の子なら話は別だと思っ
 けど……」

「そういう意味に受け取ったのかよ！ そんなタイプの人間はいねえよ！」

思わず突っ込んでしまった。

そこまで俺の頭がボケてるなら公園じゃなく病院へ行くべきだろう。

「えー、でも、友近はジャングルジムに登ったらよく思い出すよ。昔のこととか子どもの頃の思い出とか」

そんな俺の胸中を笑い飛ばすようにそう言い残し、彼女はジャングルジムの端っこのからぴよんと飛び降り、軽やかに着地した。

「住所、分かる？」

「え？ もしかして案内してくれるのか？」

思いがけない彼女の台詞に、俺も慌ててジャングルジムから降りた。

スマホアプリの地図が使えない今、地元民に地元を案内してもらえんなら大変助かる。恥ずかしい思いをしながらもジャングルジムに登って正解——とは言いたくないがともかく結果オーライだ。

早速俺は、近くに放置してあったキャリーバッグに手を伸ばす。

「その荷物って、里帰り？ それとも旅行？」

彼女は小首を傾げながら尋ねてきた。旅行用キャリーバッグだから観光客と思われるのは当然だが、先に里帰りと言われたのは意外だった。

身も心も生まれも育ちもシティーボーイの俺がまさか地元民に見えたのだろうか。いや、確かに数年はこの島で暮らしていたが、それこそたかが数年の話だ。

「物好きなことに引越してきた。それよりこの島、観光客とか来るの？」

「あー、うんとね、こっち側は寂れてるから。島の反対側は観光地化されてるよ」
 のんびりと答える少女に、俺はキャリーバッグのタグに記してある住所のメモを渡した。万一バッグを失くしたときに持ち主の住所が分かるよう括りつけておいたのだ。

「この住所なんだけど、分かる？」

「これは……きみの家も島の寂れてる側だね」

のほほんと言う少女。どうせなら観光地化されて賑わ^{にぎわ}ってる側に住みたかった。期待はしてなかったけど。

「うん、こっちだよ」

少女は桜の花びらが今も舞い散る中、道を先導してくれた。

俺はキャリーバッグを転がしながらその後が続く。

「次はこっち」

いやあ、本当に助かった。まさか地図アプリが使えないだけで俺がこんなにも使えない男になるとは思ってもやらなかった。

「あ、この次はあっちの道」

少女は道から道へとすいすい進んでいく。実に頼^{たの}もしい。田舎の畦道^{あぜみち}はコンクリートで舗装^{ほそう}された歩道に比べるとキャリーバッグが運びにくいのが難点だが、俺はなんとか付いていく。

「次そっち」

むしろ、難点は別にあつた。

道にまったく見覚えがないのである。

少女が先ほどから案内してくれているこの道あの道その道、断言してもいいがどの道も子ども時代に通って帰った記憶がない。

「……あの、道を聞いておいてこんなこと言うのあれだけど、道順ちゃんと合ってる？」

「ううーん」

「……オイ」

「やだな、ヘンなところに連れて行こうとしているわけじゃないよ？」

言って、少女は足を止める。

もちろん見覚えのない場所だ。

目の前には一軒^{けん}の書店があり、友近書店という看板^{かか}が掲げられていた。

ははーん。友近書店の友近さんということは、もしかしてこの本屋の関係者か？

「つて、まさか自分の店に客を連れて来たのか？」

「そんなことしないよー。本屋は島にうち一軒しかないから、お客さんにそこまで困^まつてるわけじゃないし、わざわざ誰^{だれ}かを連れて来たりしないよ」

「その割にはこの辺ほとんど見覚えがないんだが？ メモの住所のほう^まが間違^{まちが}ってるならもちろん俺が謝^{あやま}るが……」

「そうじゃなくて、そこ」

少女は軽い口調で、書店の道向かいの建物を指差す。

「交番」

彼女の言うとおり、そこは交番だった。

なーんだ。

……結局こいつも住所分かってなかったのかよ！

友近さん（仮）のささやか過ぎる手助けと、交番の駐在員さんの多大な尽力のおかげで、

俺はようやく目的地に辿り着いた。

見覚えのある灰色の瓦の木造建築を目にすると、疲労感に勝る安堵感がこみあげる。

懐かしき祖父母の家。外観は昔のままだ。

「なんだこれ」

しかし着いて早々、俺は目の前に広がる異様な光景に目を丸くする。

玄関前の郵便ポスト周辺に、大量の野菜がゴロゴロと転がっているんだが？

もちろんポストに野菜の山が入るわけもなく、ポストの足元に無造作に積み上げられて

いるだけだが、その量が尋常ではない。

一言で言い表すなら、まるで貢物みたいだ。

「あら。お帰るなさい、凛」

野菜の山を台車に乗せて家の中に運び込もうとしていた困り顔の美人が、俺の姿を目にするや否や、おっとりとした微笑を浮かべてそう言った。

「姉さん、なにこれ」

「なにこれって、私が聞きたいです。知りたいんですけど、本当、なんでこんなことになっちゃったのかしら？」

こんなド田舎にはもったいないくらいこの美人。俺の姉で、名を和泉百夏という。

俺は特にシスターコンプレックスをこじらせているわけではないが、長く美しい髪に切れ長の瞳、すらりとした長身と見事なプロポーション、物腰穏やかな振る舞いと、弟のひいき目を差し引いても超がつくほどの美人だ。

神戸の大学に今も籍を置いている女子大生で、島への移住を決めたのも、俺を連れて来ることにしたのも姉さんである。

「このお野菜の山は、ご挨拶しに行った農家の方々が余ったものをくれたんです。先ほどの方なんて、隣の集落からトラックで運んできてくださって……」

「どうやら、本当に貢物だったらしい。」

若くて美人でスタイル抜群、おまけに田舎では滅多にお目にかかれないファッションとセクシーな脚線美、そして本人の人当たりの良さも手伝って、うちの姉はあつという間に集落の人気者になってしまったようだ。田舎は虫が多いからな。

「姉さんが美人だからだよ」

「もう、凜ったら、お世辞が上手ですね」

「若い女が集落に来て皆が浮き足立っているんじゃないか」

「単に親切な方が多いだけです。それに、お爺ちゃんやお婆ちゃんのことを覚えている人がほとんどでしたからね。懐かしさも手伝っての奮発だと思います」

今どきの女子大生然とした派手な見た目とは裏腹に、百夏姉さんは淑やかにほえんだ。このギャップに落ちない農家の息子たちはいないだろう。なんなら農家の父親ですら嫁に来て欲しいと懇願していてもおかしくはない。許せねえよ。

「あ！ そういえば、ユッキーもわざわざご挨拶に来てくれましたよ。ふふ、とっても懐かしかったです」

と、内心憤る俺の耳に、久しぶりに聞く名前が飛び込んできた。

「……いいよ、あいつの話は」

「あんなに仲が良かったんですから、凜も自分から挨拶に行つてあげればどうですか？」

「まあ、そのうち。追々と」

歯切れの悪い俺の言葉に、百夏姉さんは微笑を苦笑に変える。姉さんも、あまり掘り返して欲しくない話題だと分かってくれているはずだ。

「分かりました。凜はまず荷物をお家に置いて、お爺ちゃんたちにご挨拶を済ませたら、お野菜を運び込むのを手伝ってくれるかしら？」

百夏姉さんもそれ以上ユッキーの話を追及することはなかった。

ひとまずその場に野菜を残し、俺は七年ぶりとなる祖父父母の家の敷地へと入る。

まず庭が広い。折角のスローライフ、家庭菜園を始めてみようかと思えるほどに広い。年季の入った民家だが、小さいながらも縁側があり、開放的で風通しも良い。大きさも若者がふたりで暮らすには広すぎるくらいで、とてもではないが都会で手に入れられる敷地面積ではない。当然、掃除も手つかずだ。

それでも仏壇の掃除だけはすでに姉さんが真つ先に済ませてくれていたようだ。今は線香が炷かれ、細い煙が緩やかに立ち昇っている。さすがの氣立ての良さである。ご先祖様たちもご満悦に違いない。

「ただいま。爺ちゃん、婆ちゃん。これからよろしく」

俺は仏壇の前に正座し、久しぶりの挨拶とともに、無事の到着を祖父母に心の中で報告すると、黙禱を終えた。

引越した初日。こうして、きょうから俺の新しい生活が始まるわけだ。島暮らしは都会に比べて遥かに不便だろうが、やっていける気はする。

——と、このときばかりは思っていた。

俺はその夜、最愛の姉と食卓を囲み、農家の方々に貢がれた野菜の甘さに舌鼓を打ち、広い風呂で足を伸ばしてくつろぎ、歩き疲れていたことも手伝って夜もぐっすり快眠だ。それはいい。

翌日から、高校の入学式が始まるまでの数日のうちに姉弟ふたりで大掃除を開始したのも、新生活の始まりを感じられて楽しかった。そこまではいい。

ただ、スマホはいつまで経っても見つからなかった。フェリー会社はもちろん交番にも連絡を入れたが、未だ届けられていないとのこと。

「田舎だからってのんびりし過ぎじゃないか？ まったく、個人情報漏洩とか気にならないのか？」

スマホの代わりと言っちゃなんだが、祖父母の家には旧型とはいえパソコンがあり、俺はあまりのありがたさに仏壇を拝み倒したのだが、残念なことにインターネットの再契約が必要だった。

なのにネット契約のための実店舗が島にはない。
は？ 過疎すぎるだろ。

すでに再契約依頼を出しているのだが、島の外から担当者が来るのに時間がかかっており、高校入学後もパソコンは未だネットに繋がっていない。極めてローカルのままだ。香川県の陰謀を感じる。

まあ孤島なんて存在自体がローカルなもの。これも平和なスローライフの一環と思えば、多少以上の不便はあるものの、許せる許せる。

落ち着いた暮らし、穏やかな波風、緩やかに進む時間。ここにはなにもないが、なんだってある。

我ながら非常に抽象的な表現でいい感じに誤魔化したか、悪い暮らしではないのだ。俺が納得いかないのはひとつだけ。

新天地となる今後三年間通う予定の高校。そこに通う同級生たちが——男女交際にしか興味がなく、恋愛事に夢中の田舎者ばかりだったのだ。

男子『可愛い彼女と付き合いてえ』

女子『イケてる彼氏が欲しー』

こう言っちゃ失礼だが、セックスしか娯楽のなさそうなど田舎だけのことはある。

恋愛する気のない俺にとって、この空間はひどく場違いだった。

中学時代、娯楽施設が山のようにある都会の学校では、クラスメイトたちは誰もが多趣味だった。色恋沙汰に興味はあっても、色恋だけに興味があつたわけじゃなかった。ここ微妙なニュアンスだけと分かれ。

年頃の少年少女に彼氏彼女がいるかいないかは置いといて、俺だって健全な青少年だからイチヤツついているカップル爆発しろなんて心の中だと思うことはあっても卑屈に口に出すつもりはまったくない。

ですが学校は神聖な学び舎であつて合コン会場じゃないですよ？

朝礼前から放課後までひたすら男女混合でどいつが好きだのあいと別れただのそいつ今フリーなんだつたら私がコクつちゃおだの、そればかりである。

確かに義務教育は終わった。だが高等教育をなめるな。

学校には勉強しに來い。部活は真剣にやれ。下心で交友関係を築くな。ここはやりもくハイスクールじゃないんだ。

お前らその歳で人類繁栄に余念がないとか、少子化対策について真剣に考えてるとか、素直に凄まじいぞ。政府から礼金でも貰つてるのか？

——そんな皮肉さえ、口に出せばモテない僻みだとか言われるんだろう。

もちろん言う気にはなれない。俺は決して人種差別主義者ではないが、思想の違う人間とのコミュニケーションほど難しいことはない。俺、意気消沈。

しかも当然と言えば当然だがクラスメイトたちは全員地元民。お互い中学校からずっと顔見知りらしく、友人関係もそのまま移行している。

彼らの目に、恋愛教室に馴染めない異邦人の俺は果たして何者に映るだろう。

男子『あんなやつ中学にいたっけ？』

女子『いたっけ？』

これで終わりだ。実際終わった。ENDである。高校生活、終了のお知らせである。

一応、自己紹介の機会があつたので神戸から来たことは伝えてみた。

「あー、神戸から来ました、和泉凜太郎です。この島に着いてからスマホなくて困ります。なんでもいいんで何か心当たりのある方、和泉まで」

やる気の欠片もない上に、自己紹介ではなく近況報告だった、しかし。

「神戸って兵庫の？ 都会じゃん」

「高松より都会なの？」

「バーカ、さすがに高松には負けるっしょ」

「東京、横浜、大阪、高松だからな」

高松ってどこ……？

神戸ブランドも地に墜ちたものだ。クラスメイトに高松未満という謎の烙印を押され、俺の高校生活は出鼻を挫かれた。彼らの中では神戸より高松のがイケてるらしい。

とにかく、俺の高校生活は始まったと同時にすでに終わったようなものだった。

周囲と言葉は通じてても価値観が通じない。俺も恋愛脳の若者になれば馴染めるのかもしれないが、アイデンティティを投げ捨てるくらいなら一生彼女いないほうがマシだ。

とはいえクラスメイトたちも、俺に対して少し塩対応であることを除き、恋愛沙汰さえ絡まなければ牧歌的で気の良いやつらなのだが……。

当然ながら学校は生徒数も少なく、部活もそこまで賑わっていない。それでも体ひとつあればなんとかなる体育会系はまだマシなほうで、文化系の部活の大半は部員不足で休部なり廃部なりしている。

結論。不名誉だと罵られることを重々承知の上で言わせてもらう。田舎の若者が夢中になれるものなんてスポーツとセックスだけなのだ。

「野球部にでも入って甲子園目指そうかな……」

こうして張り合いのない高校生活が始まり、俺は人生を見失っていた。

もちろん自分でも頓珍漢な台詞なのは自覚している。言ってみただけだ。そもそも本気でスポーツやろうとかまったく考えていないんだが？

「ん？」

窓際の席から運動場をぼんやりと眺めている間に、俺は教室でぼっちになっていた。

広い教室にひとり。俺だけ。あつ、ちよつと寂しい。

このくらいのものでメンタルが弱る。俺は弱いよ。

「和泉くん、まだいたんだ。そろそろ教室閉めるよ？」

「はい、ごめんなさい」

弱っていたところに廊下から日直の声が聞こえてきたので、俺は大人しく席を立った。

じゃあな、俺の席。また明日な。

で、その日直はというと、先ほどまで教室にいなかったはずなので、おそらく外で何か用事でも済ませていたのだろう。

「悪かったな、俺がもたもたしていたせいで鍵がかけれなくて」

「ううん。今戻ってきたばかりだから、全然気にしないよ」

日直の女子生徒は気安い口調でそう言った。

女子の制服は、海に近いせいだろう、昔ながらのセーラー服だ。都会だとブレザーが主流でセーラー服なんて滅多に見なかったもので、古めかしいのに逆に新鮮味を感じる。

そういえば、姉さんも昔この制服を着ていた覚えがある。

小学生の頃の記憶なので曖昧だが、黒髪を長く伸ばしていた姉さんと古風なセーラー服の組み合わせは弟の身びいき関係なく素晴らしかった。うんうん。

「なんの用事だったんだ？ プリントを職員室に運ぶとかだったら手伝ったのに」

「あ、そういうのじゃないから。単に、隣のクラスを職員室に運ぶとかだったら手伝ったのに」

「呼び出されたって……」

女子生徒を男子生徒が体育館裏に呼び出すなんて、どう考えても解答はひとつしかない。

「うん。なんかね、告白された」

廊下に誰かの上履きが落ちてるー、なんて言い出しそうな口調で、日直はとんでもないことを口走った。

「え、それ、まさかOKしてきたとか？」

「ううん？ 断ったよ？ だって知らないひとだったし。そもそも、高校に入学してまだ

一週間なのにもう四人目だから、告白されるのも嫌になっちゃったし」

日直はさらにとんでもないことを言った。

こいつそんなモテるのか。

「あ。和泉くん今、こいつそんなモテるのか、みたいな顔してるよ？」

いやそんな顔してたけどさ。

——だってこいつ、ジャングルジム女だぞ。

「友近、自分で言うのも恥ずかしいけど、よく告白されるんだよ？」

彼女の名前は、友近姫乃。

先日ジャングルジムで遭遇した天然っぽいほわほわした美少女で、まさかやまさか同じ学校で同じ学年の、クラスメイトと相成ったわけだ。

そう言うど運命的なものを感じてしまうかもしれないが、これは単に生徒数が少ないことに起因する。うちの学校、高校一年はなんと二クラスしかないのだ。

ちなみに一クラスにだいたい十五人。日本よ、これが過疎地だ。

なのでクラスメイトたちの顔と名前は簡単に覚えたり、その中にジャングルジム女がいたことにも初日で気づいた。だって席が隣同士だったし。

邪険にする理由など当たり前だが欠片もなかったので、机が隣も多生の縁、俺と友近はごく普通に友人付き合いを開始したわけだ。

「まあ、和泉くんはこの悩みは分らないかなあ」

「おい友近、それって遠回しに俺がモテないとデイスってらっしやる？」

「え？　じゃあ、おモテでいらっしやる？」

真顔で聞かれた。そんなわけないので俺は顔を背けた。俺は弱いよ。

ちなみに友近は顔が良い。口を開けば頓珍漢だし、ジャングルジムで倒立キメるような奇行もあったが、黙って大人しくしてさえいれば美人はいつだってミステリアス、顔の良さだけで何人もの男子を勘違いさせるだけのオーラがある。

「あ、こっち近道だよ」

なのに突然、廊下の窓から身を乗り出して校舎を出た。

もちろんここは一階なので危険はなにもないのだが、女子生徒がやるにはいくらなんでもはしたなすぎるだろ。

「やめなさい、はしたない」

「だいじょうぶだよ。友近、スカートの下にはスパッツ穿いてるから」

いつものぼんやりとした顔でそう言うと、友近は廊下をショートカットして靴箱のある方向へ上履きのまま向かっていく。

自由すぎる……ってちょっと待て。

「友近！　鍵！　教室の鍵を職員室に持って行けよ！」

俺の叫びが届き、友近はＵターンしてきた。

「ごめんね、考え事してたら忘れちゃった」

「考え事？」

「うん。告白されたときに、相手の男の子を傷つけないようやんわりと断る方法とかないかなって」

「俺からすると贅沢な悩みなんだが？」

澄んだ瞳でどこか遠くを見ながら、友近は窓枠に足を乗せてまたもや窓を使って廊下へ舞い戻ろうとする。いくらスパッツとはいえスカートの中が見えかねない。

「やめんか。上履きが土で汚れたまま廊下に戻るな。鍵くらい俺が持って行ってやる」

「ほんと？　助かる。ありがと、和泉くん」

「廊下が汚れるのが嫌なだけだ。勘違いしないでね」

「こんなに気が利くのに、どうしてモテないんだろうね……」

しみじみとした暴言やめる。泣いちゃうだろ。

ちなみに、友近はそのまま帰るかと思いきや、俺が職員室に鍵を届けるまでの間、靴箱の前で律儀に待っていた。暇なやつだ。

「お札になんか奢るよ」

「そんな大層なこととはしてないんだが」

「じゃあ奢らないけど、なんか食べに行こ？」

こいつ本当に自由だな。

「うどん以外な」

「えっ」

俺の言葉に友近は固まった。

ちなみにこの学校の周辺に高校生が駄弁れそうなファミレスは存在していない。だって田舎だし。

というかそもそも島にファミレス自体が一軒しか存在していない。そして当然ファミレスがある場所は島の反対側の観光地化が進んでいる区域だ。

なので、四国本島から離れていようと香川県民であることに違いのない生徒たちは、自然とうどん屋に集まる。普通なら放課後はカラオケとかゲーセンなんか当たり前だが、そんなものは島の外にしかない。

「うどん飽きた」

「うどんって飽きるものなの？」

愕然とした顔で聞き返してくる友近。

「おでんもあるよ」

「おでんも飽きた」

なぜかは分からないが香川のうどん屋にはおでんがサイドメニューで必ず並んでいる。しかもセルフサービス。うどんにのせるネギも自分で店の裏の畑から引っこ抜いて刻む。びっくりするほど香川県。初めて体験したときは俺も戸惑った。

「うーん」

候補にうどんが封じられただけで友近は思いつき悩んでいる。

「俺まだ島に戻ってきたばかりで知らないが、放課後に寄れる遊び場みたいなのはなかよ」

「公園とか？」

「高校生にもなつて公園で遊ぶ趣味はない」

「でも、小学生のときは友近もよく公園で遊んでたよ?」

無性にこちらをチラチラと盗み見しながら訴える友近。

邪念のない綺麗な瞳だ。本当にこいつ顔の力が強い。

見つめられるとドキドキしてしまうだろ。俺はシャイなんだが?

「まあ普通は、友達の家に集まって遊ぶのが一般的かなあ」

他に遊ぶところがないのだから、仕方ないと言えば仕方ない。

遊び場がないからこそ、恋人を作ってイチャイチャしたいんだろなという田舎の若者の気持ちが行き病のように蔓延するのも無理はない。

友近のように、そのせいで矢継ぎ早に異性から告白される側の人間からすればたまつたものではないだろうが。

「テレビ見たりとかゲームしたりとか」

友近はそう言うが、この島はゲームだけでなくテレビ事情も厳しい。

地上波の放映チャンネルは残念ながら俺も知らないものがほとんどだ。というか片手で数えるほどしかない。少なすぎない?

そしてその中に、一番重要なサンテレビがなかった。

サンテレビジョンは関西圏の地上波では随一のアニメ番組放送数を誇り、兵庫・大阪の全域で多くのアニメオタクたちに愛用されているチャンネルだ。

なにを隠そう俺も長い間お世話になってきた。七年前に島を離れて神戸で暮らし始めてからサンテレビによって育てられたと言っても過言ではないほどだ。

楽しみにしていた春のアニメ新番組の大半が、関西ではサンテレビで放送予定。

なのに香川県では映らない。まさにアニメ過疎地。

それでも俺が立ち直れたのはひとえにBS放送のおかげだ。家のテレビにBSが映ると知ったとき、俺は再び祖父母の仏壇を拝み倒した。

「なら、和泉くんの家に行こうよ」

——などとサンテレビのことで頭がいっぱいになっていた俺の耳に、不意打ちのように友近の呟きが届いた。

「……は?」

今、俺の家って言った?

「友近の家はまだ営業中だし。遊べないよね」

テレビのチャンネルは少ない、パソコンはインターネットに繋が^{つな}っていない、ゲームは条例で一日一時間、そんな俺の家に、なぜクラスメイトの女子が遊びに来るんだろう？

いや、そもそも、それより大きな問題がひとつ。

「……そうじゃなくて、え、だって、俺は男なんだが？」

「うん。見れば分かる」

「そしてお前は女の子だ」

「うん」

微笑^{びしょう}とも苦笑ともつかないはにかみを俺へと向ける友近。

「普通、女の子はそう簡単に男友達^{ともだち}の家に遊びに行ったりしないだろ？」

「しょうがないよね。他に遊べるところがないもんね」

震え^{ふる}ながら口にした俺の抗議^{こうぎ}を、友近は一笑に付す。

どうやら俺はまだ田舎特有の距離感^{きりかん}の近さを見誤^{まちが}っていたようだ。

こうして、新しい高校生活が始まって数日で、それなりに話すようになったばかりの女達が、早速^{さつそく}家に遊びに来ることになってしまった。

続きは、8月20日発売のファンタジア文庫で！

©Katsumi Misaki, Mitsushi Shona 2020